

言行録にみる

驚くべき数々の主張

舛添要一都知事の素顔①



「日本人が人類初の原爆被爆者になったから空想的平和主義を根付かせた」

舛添要一氏の驚くべき「平和論」は、自著「日本を問う」(実業の日本社91年)でも展開されています。

平和への願いは「世界の非常識」と指摘

たとえば舛添氏は、

「『世界の常識は日本の非常識、日本の常識は世界の非常識』などと言われることがある・・・なぜそのような日本は特異な国になったのか。その原点は、先の第二次世界大戦での敗戦、そして占領という体験であろう。とりわけ広島、長崎に原子爆弾が投下され、日本人が人類初の原爆の犠牲者

義は厳しい現実の前に力を失ったが、日本は「米ソ間で分割占領されることもなく、圧倒的なアメリカの核抑止力に依存して安全を確保することができたため、実際にはアメリカに甘えながら、高踏的に『アメリカ帝国主義』やアメリカの軍事力を批判することができた」と持論を展開しています。

になったことは、日本人の間に理想主義的(あるいは空想的)平和主義を根付かせた」と述べています。氏は、同じ敗戦国のドイツと日本を比較。ドイツは東西に分割され、東西冷戦の最前線にたたかれたため空想的平和主義

舛添氏の「平和」論の中身とは――

「平和を得るには戦争準備が必要だ」

日本が世界の尊敬得るには軍隊が必要だ主張

では、次のように述べています。

「平和」論とは、どうい

うものでしょうか。自著「母を思い国を想う」(読売新聞社98年)

う」(読売新聞社98年)

改革を要することが多々

ある。まず第一に、国家とは何かということ、全日本人がもっと真剣に考えるべきである。国民の生命と財産を守り抜く、そのために外国からの侵略を排除し、犯罪集団を壊滅させねばならない。

そして、そのために必要な手段を持たねばならない。近代国家の場合、それは法であり、それを実行するために不可欠は物理的手段、つまり軍隊や警察である・・・

『平和を望むものは、戦争の準備をする』これが歴史の教訓であり、国際社会の常識である。――

と強調しています。憲法九条を敵視する舛添氏

さらに「戦後の日本では、『軍隊を憎み、平和を唱えていけば、平和がやってくる』という誤った考えが、広く流布していった。・・・暴力装置を国家は保持しなければならぬ。ところが、日本は憲法九条をもつことで満足してしまった」

(自著「舛添要一の日本を問う」実業之日本社)と憲法九条を敵視しています。

「自衛隊のイラク派遣は重装備で武器使用できるようにせよ」

さらに舛添氏は、自衛隊のイラク派兵が大問題

になっていた2003年の国会でも、重大な発言をおこなっています。

舛添氏は、「サダム・フセインの残党が散発的

に英米軍などを襲撃しており、100%安全とは言えない」「だからこそ民間人ではなく、自衛隊が行く必要があるのです。特にバグダッド近郊のファルージャやラ

マディでは、サダムに厚遇された部族が反抗を繰り返してあります。また、略奪などの犯罪も発生しております。実際には、武器の回収、いわゆる刀狩りも期待した成果を上げていたとは言えない状況にあります。したがって、派遣される自衛隊に対しては、装甲車や無反動砲などの重装備を施す必要があると考えます。危機管理の常識として、重装備の方が不測の事態を避け得ることを銘記する必要があります。日本政府としてはどのような装備をお考えなのか、総理の答弁を求めます。更に言えば、武器使用基準の緩和が必要だと考えます」と質問。さすがに武装した自衛隊のイラク派遣には憲法9条の制約の下で逡巡していた当時の政府をけしかけました。

